

OwenとMaclure : Maclure-Fretageot 往復書簡集によって

| | |
|-------|---|
| 著者 | 浅井 喜久雄 |
| 著者別表示 | Asai Kikuo |
| 雑誌名 | 金沢大学教育学部紀要. 人文・社会・自然 |
| 巻 | 10 |
| ページ | 1-12 |
| 発行年 | 1962-03-17 |
| URL | http://doi.org/10.24517/00005210 |



Owen と Maclure

—Maclure-Fretegeot 往復書簡集によって—

浅井喜久雄

I Owen と Maclure の提携

最初に William Maclure の人柄について簡単に触れたい。彼は1763年にスコットランドに生れた。Owen より8才年長で若い頃クラシカルな教育を受けた人だが後商業に従事して40才までに巨富を擱んだ。この点 Owen に似ているが彼は直ちに商業から身を引き保守的な英国を嫌ってアメリカに渡り地質学者として名を成した。当時のアメリカ全州を踏破して地質調査を行い地図を作って1809年公刊したという非凡な精力の持主であった。これ程の学者だが手紙となると構文は奔放綴りは間違ひだらけで句読点もつけず、その上無類の悪筆だったのだから7不思議の1つである。しかも彼は社会思想家、教育思想家としても極めて優れており生涯科学研究と教育改革にたくましい意欲を燃やしアメリカへ Pestalozzianism を輸入した最初の人ともなった。彼は青年時代に受けたクラシカルな教育をつねづね罵倒し“豚の如き無智”しか与えられなかったとし教育こそ人類最大の悪弊である、人類にとって最も有難き改革は教育改革だとした。ところが偶然にも1805年 Switzerland で Pestalozzi に会って開眼され直ちにその熱心な帰依者となり Pestalozzianism をアメリカに普及をしようとして決心し、まずパリーに住むペスタロチの共同者 Joseph Neef に懇請してフィラデルフィアに移住して貰いそこで学校を経営させた。もちろん彼の財政的援助によるものであり、この幼児学校が事実上アメリカにおける Pestalozzianism の嚆矢となった。この時 Maclure は Neef に対して3年間年500ドルの手当を保証し英語の勉強から始めてほしいと言っている。当時すでに the Academy of Natural Sciences of Philadelphia が組織されており Maclure は1817年その会長に選ばれ1840年の死に至るまでその地位にあったがその関係から学界における交際も広くその因縁から後日数人の自然科学者が Maclure と共に New Harmony に参加することとなり、この辺境の寒村が当時アメリカ文化の1中心となったのであった。Maclure の活躍はそれだけにとどまらない彼は1819年スペインに在りみずからペスタロチ式の農工学校を創立して貧困子弟を教育した。

一方パリーで少年学校を経営していた William S. Piquepal と少女学校を経営していた Marie D. Fretegeot 夫人（ともにペスタロチ派の教師である）に対しても相当額の財政的援助を与えた。結局 Maclure はペスタロチを訪問すること前後6回。“余はこの30年間無智こそ人類不幸の最大原因と考えてきた。”もう60才に近いが青年時代より終始1貫そのよって立つ social radicalism の主張はいよいよ冴え、その胸奥にはいつまでも青年の如き深紅の情熱を秘めていた。自由を得んためには、まず無智を排除しなければならない。政治社会においては知識は力である。知識ある人間をいつまでも奴隷化しておけないのは丁度無智な人間がいつまでも自由を得られないと同じだ。経済的平等と自由と教育とはからみあっている。財産の平等は民衆に活力を与え知識の獲得を容易にする。the cake of liberty を勤労大衆に公平に分配することによってのみ国民の幸福が得られる大衆を救うものは大衆のみ。こうした明快な表現は Owen よりはるかに radical であり John Gray に酷似すると Bestor 博士も言っておられる。⁽¹⁾

Maclure はパリーの Fretegeot 夫人をも説得してアメリカに移住して貰うこととなる。彼女は1821年夏パリーを去ってアメリカに渡り、11月20日頃フィラデルフィアで学校を開設した。次いで Phiquepal も Maclure に勤められて1824年12月末フィラデルフィアに移住した。しかるにスペインに俄かに反動の嵐が吹き荒れ Maclure は身を以てイギリスに逃れたのが1824年の春であった。かれはこの国でまず新思想“反obscurantism”の昂揚に感激し7月 Owen を New Lanark に訪れたがこれが両者交友の初まりであった。しかも Owen と Maclure を New Harmony で結合し協力せしめる有力な契機となったものは Fretegeot 夫人であった。両者よりの信任は厚くとりわけ Maclure は彼女が1831年11月4日村を去るまで村における学校経営と教育をすべて一任していた。Owen と Maclure の協力はその後財政問題と教育政策に対する意見の相違から不幸な結果を招き Owen の社会的実験は1827年

6月1日かれの離村を以て終ったとされるが、Maclureの New Harmony における教育実験はその後永く繁榮し彼の創立した the Workingmen's-Institute は今日も立派に生き残っている。以上 Owen と Maclure との因縁について若干説明を加えた。(2)

さて Fretageot 夫人はフィラデルフィアの自然科学々会のメンバーに対して Owen の思想について積極的に話題を提供しており1823年には会員間で協同村の原理が研究されていた。1822年にはニューヨークでも the Society for Promoting Communities が結成され Owenism が研究された。1824年8月25日付で Maclure がロンドンから F 夫人に送った手紙は興味深い。“私は Owen 氏に New Lanark で会ったが、これこそ私の生涯中最も愉快な日であった。Owen 氏が勇氣と忍耐によって執拗な悪意ある反対を克服したのは立派である。幸福で満足そうな大人子供の表情をこれ程多数見たことは私の経験にない。何らの圧迫も制限もなしでこれ程秩序ある真面目で明朗な社会を見たことがない。それはフィラデルフィアの新刑務所で行われる moral experiment に似るが、しかしこれには行政的統制が加えられている。子供達は2才から博物、地理、統計を教えられるが知識こそ Power であるのみでなく富であることが証明されている。Owen 氏の工場では能率が高く生産物にはプレミアムがついているのである。Owen 氏は国家と教会との強力な団結に対抗して成功しているので私もアメリカにおける実験的農学校が moral experiment の点で世界中で一番だと考えて自分の計画に期待を強めた。”(3)

その頃1824年8月14日アメリカから Richard Flower が Owen を訪れて Rapp の Harmonie 村を買収してほしいと申入れてきた。イギリス内地で最少限の協同村をつくっても相当の資金がいる。Harmonie はその 1/4 の資金で譲渡され、しかも土地の広さが20倍以上もあるという。Owen はアメリカに渡って現地を見たいと思った。その頃1824年9月10日 Maclure はロンドンから F 夫人に手紙を書いている。“私の科学と有用な知識の普及計画は今日まで空想的だとして冷淡に扱われてきた。労働階級はあまりにも無智でかれら自身の利害の判断ができないのである。Robert Owen 氏は今ここに来ている。人類を幸福にし無限の喜びと満足とをアメリカの実験から引出してみせるつもりだ。欧州で人類に関する正しき考えを持つ the only man がかれの才能を地上において最も勝れた最も合理的な

団体に加えるであろうと思うとこれに勝る満足と喜びはない。この仁慈なる実験が成功すれば私はそれを祈ってやまぬが多くの人類の真似るところとなろう。人類の歴史に1エポックを劃するであろう。”

Maclure ほどの学者が Owen のアメリカ実験に期待してこれ程の讃辞を送ったのである。当時、進歩主義者の間では Owen は正しく希望の星であった。F 夫人も負けてはいない。1824年10月21日付の手紙を以て Maclure に次の如く言った。“Owen氏は9月20日ニューヨークに向って出帆された由、そして私の学校えみえると言うが私としても永年お会いしたく憧れていた方のこと故、お会い出来ましたならばどんなに嬉しいことでありましょう。Owen 氏の計画はこの国にとっても大きい利益となりましょう。人類の幸福のための偉大なこの計画に小さな役割を果せると思うと喜びに堪えません。”(4)

Owenは1824年11月4日ニューヨークに上陸朝野の嵐の如き大歓迎の中に New Views を大いに語った。11月19日から23日にかけて、フィラデルフィアに滞在したがここでも Owen と Communitarianism の人氣は素晴しかった。この時初めて Fretageot 夫人に会う。Owen はついでワシントンにゆきここでも大統領以下朝野の大歓迎を受けた後11月28日西部へ向って出発した。途中ピッツバーグでこの町の Communitarians に迎えられ附近の Economy を訪れて Father George Rapp に会った。12月16日 Owen はついに Harmony に到着した。1825年1月3日売買契約が成立し署名が行われた。2万 acres の土地、約180戸の建物それには700人が入居しうるものだった。Owen は村に2男の William Owen と Macdonald を残留させ同日東部へむかって出発。この1月3日から4月13日までの彼の旅行は Owen の生涯における最大の勝利の1つであった。かれは公開 Campaign を以て全国民と国会に訴え初めたのだ。その頃1825年1月13日パリーから Maclure は F 夫人に次のような手紙を書いた。“私は利己的な人間で Owen 氏を改革の先駆者とみています。彼の巨大な mechanism のためには広大な道が必要でありそのあとについて行きさえすれば我々の子供じみた計画の如きは闘うべき偏見迷信と偏執の半分をまぬがれうることでしょう。しかし彼の計画は国家と教会の安全に対して深く斬りこんでいるのでこれら2つを利用し略奪している腐敗せる偽善的徒党から猛烈な反撃を加えられるでしょう。” Owen は1825年2月初め頃フィラデルフィアを再度

訪問し Maclure の友人達と会合しこれらの科学者の入村を希望しているが、中で最も熱意を示したものは F 夫人であった。こうして Owen の社会的実験と Maclure の科学的教育的実験の合同計画は実りつつあった。その頃1825年2月9日 Joseph Story という判事が Owen についてその妻にらせた手紙が残っており、それによると彼は Owen を so visionary an enthusiast と言いつたか Utopia の国の住民の如くだが人物は美事だと書いている。1825年2月11日付 Maclure 宛ての F 夫人の手紙をみると彼女等の入村希望はいよいよ強まっております、そのことを Maclure にしきりに懇請している。“Owen 氏が言われるには教育の実験も出来るだけ障害を除いた環境で行わなければ効果が少い。フィラデルフィヤなどでは30年間このようなことをしていても周囲の諸害悪を克服出来ないであろう。沈黙は結局偏見を支持することであると云われたが私も同意見です。フィラデルフィヤでは New Harmony 参加の用意をしている人も少くありません。”⁽⁵⁾

Owen は1825年2月25日ワシントンの国会で第1回3月7日に第2回の講演を行ったが聴衆は大統領以下堂にあふれた。内容は直ちにジャーナリズムによって全国的に報道された。ところが留守中村を守っていた23才の William Owen は1825年3月24日の日記に次の如く書いて村の前途を案じていた。“改革者の喜びは現実におけるよりもはるかに多く Contemplation にあるものの如くだ。旧体制の社会で愉快に暮らしていた人々がここへ入村して喜びを増大しうるか疑問である。” Owen は4月13日村へ帰った。彼の東部100日の大勝利はしかし New Harmony における彼の破壊であったと Bestor 博士は書いている。Owen の楽観は無際限のもので“今や変革の Eve に当る。この変革に比べれば今日まで歴史上の凡ての革命はその名に値しない。”“凡ての徳を進め富をつくるための団結と協同の原理は個人の利己的システムよりも遙かに勝れたものなることが広く認められた。現状からみてオハヨ川の北方全地域が1827年までには変化のために熟するであろう。”⁽⁶⁾

1825年5月2日バリーから Maclure は Silliman 宛手紙を書いている。“労働は生産の原因である。社会の凡ての所得は労働者によって作られる。Great Britain の年生産物は人口1人当り54ポンドとみられるが生産労働者えは11ポンドしか分配されない。1/3である。1/3は1/3税や租税、雇主などに取られているが、かか

る制度は正義にかなわぬ。かかる害悪の根元に斧を置き詐欺貧欲犯罪の誘惑をとり除くことが新体制の眼目である。勤勉な労働者に彼等の労働生産物の大部分を与え1日数時間以上に労働させず必要な慰安を与え残余の時間を精神的進歩と recreation とに費やすというのが新体制の計画なのである。新体制の敵の唯一の反対は凡ての新しきものに反対する永遠の呼びである人間の貧欲をどうして根絶出来るかと言うのだ。なるほどそれは今直ちに根絶しえないであろう。しかし我々はこのすざまじい反社会的欲情 passions を断乎として抑圧してゆく。今日までの社会では不正残忍な支配者達が揺籠から墓場までこの欲情をそそのかせ募らせてきた。新体制の目的は人類に大きい利益を与えるのだから公正堂々たる実験の価値があるのだ。” Maclure はついにフランスを出発し1825年7月9日ニューヨークに到着すると F 夫人は彼に7月12日付の手紙を送った。例によって恭々しいが、今度は中々しんのあるもので“これまで Owen 氏のことについて私に言われるあなたの言葉は私を納得させません。私はあなた以上に Owen 氏のプランについては研究しておりこの仁慈なるお人の手伝いをしたいのです。”と書いている。⁽⁷⁾

さて New Harmony では Owen が4月13日に帰村すると5月1日からいよいよ the Preliminary Society が発足することになった。約900人が参加していたが Owen の指導が曖昧であったため早くも混乱が起っていた。William と Macdonald が留守をあづかっていたが Owen から事務内容の要領を教えられていなかったため処理ができない。入村者の選考の基準が定っていないしどの建物をどう使うのか農業をどう手をつけてよいのかも分らなかった。村の経営は理論ではもう動かず具体的対策がなくてはならなかった。それでも村民達は New Lanark を労働者の天国とした Owen の帰村を待ち兼ねた。Owen 自身も現場に戻れば万事処理できると自信をもっていたようだ。しかし彼が帰村しても例えば最も中心問題である共産制について質問されてもはっきり答えない。事実 Owen には未だ定見なく the Preliminary Society の期間中考えてみようと思っていたらしい。入村者選考基準もそれらしいものもなかったので質の劣悪な者が沢山入りこんで来た。しかも Owen は1825年6月5日 New Harmony を去って英本国に渡り7ヶ月以上帰らなかった。渡英の際、彼は7月6日フィラデルフィヤへ行き7月15日ニューヨークで Maclure に会い、7月16

日出帆 8月6日リバプールに上陸した。⁽⁸⁾

Maclure はニューヨークから1825年7月15日付にて F夫人宛返書を書いた。“想像力が心中1つの Favorite idea にのみ捉られると狂気に近づく。Owen氏のプランの有益さについては言うまでもないが冷静に考えるべきことが2つあります。1つは彼のプランの合理性と理論の堅実性です。この点私も安心している。2つには実行のための手段の問題です。村民達は僻んでいて頑迷であり自らの利害の判断ができず、たちまち反対の方向に振れてゆく者達です。数千年の間、偽善的な僧侶たちは政治的タイラントに助けられて狡猾と才能とを以て人民を鉄の慣習の鑄型にはめこんで来ました。私は少年教育こそが我々のシステムの支柱であり基礎であると思います。しかし時間がかかる。この町でも痛感するが会う人々の凡てが金儲けを唯一の目的にしています。放逸な投機と黄金の夢が彼等の心を捉えているだけです。Owen は軽蔑に似た無頓着の沈黙を賛成と感嘆しているのではなからうか。何事も慎重に考えていって下さい。”⁽⁹⁾

Owen はイギリス滞在中何かと New Harmony の諸準備について配慮するかと思っただが殆んど実質的なことはせず相変わらず propagandist として活躍を続けた。その頃 John Gray の“人間幸福論”に刺戟されたと言われる。ただ6呎四方の協同村のモデルを作ってアメリカへ持帰った。彼は10月1日にイギリスを出帆し11月6日にニューヨークに上陸した。New Harmony の村民の生活は言うまでもなく生産が消費に遙かに及ばず不足分は Owen が私財を投じて補給していたので相当窮屈であった。“この冬は馬鈴薯もカブラもキャベツも喰べられまい”と9月に Pears も書いていた。1825年10月22日号の *New-Harmony Gazette* によると村民800人余の中、専門職人というべきものが137人、その中に農民が36人だったと言うわけで Rapp の残っていた工場のほとんどを動かせなかったのだ。さて Owen は11月6日ニューヨークに上陸すると、8日に諸新聞に既成宗教非難の文章を掲げさせて熊蜂の巣に石を投げこんでしまった。続いて11月25日この町での講演において彼はバイブルを神の心の黙示に非ずとして、さらに火中へ油を注いだ。11月11日から14日まで、また24日25日にフィラデルフィヤを訪れているが、この間について Maclure 達の New Harmony 参加が決った。1825年12月8日 Robert Owen, Maclure, Fretageot, Phiquepal, Say, Lesueur, Price, Robert Dale Owen, 他総勢約40人が

ピッツバーグに集合し Keelboat “*Philanthropist*” に乗船して出発。途中ビーバ附近で氷に鎖されて進まず Owen は一行と分れて別行動をとり1826年1月12日 New Harmony に入った。残りの人々も1月26日到着、Owen は彼等を “*Boatload of Knowledge*” と呼びアメリカ第1の学校をつくると誇った。こうしてフィラデルフィヤの文化の中心とされた有名な教育的科学的事業が Indiana 州の the wabash 川のほとりの寒村に移動したのだった。⁽¹⁰⁾

II New Harmony 万華鏡

1826年1月12日 Owen は村に帰ると直ちにそれを the New Harmony Community of Equality に改組しようとした。1月26日に Owen と Maclure を除き7人の新憲法起草委員が選挙された。2月5日全村民一致で原案を採択したが条文等は *New-Harmony Gazette* の2月15日号にのせられた。ところがやはり内容が明確を欠き共産制も労働と分配の計算方法も剰余価値の処置も退村の場合の計算も凡てあい昧であった。村民の加入も旧村の者がサイン一つで許された。Community of Property を原理として掲げ乍ら村の土地は Owen との賃貸借契約によるのか共同経営になるのか彼が寄附するのかわらなかつた。しかも2月8日に委員会の発表した Valuation of Labor は窮屈なものでいくら苦勞して働いても家族の食費がやっという位の荒野の生活を40年も予想しなければならなかつた。村には下品で野暮な連中も少くない。いつまでも Owen の財産からの補給が続くはずもなかつた。こうして早くも2月19日頃新憲法は停止され、1827年1月1日まで村の経営は Owen に一任するという決議がなされた。この申出を Owen は3月4日に正式に受諾したが条件をつけた。一つは村に損失を生じた場合全員の責任とすること及び剰余価値は村として蓄積することというのであった。もうこの頃は村民の志気甚だ振わずまず methodism を奉ずるアメリカ人の1 group が80人程 Owen の deistic ideas を嫌って Macluria の名称をつけて2月15日に独立してしまった。これが Community No. II であるがそれも短命で11月には解散してしまった。3月8日にはイギリス農民グループによる Community No. III の分村計画が発表され、正式の名称を Feiba-Peveli としたがその人数は40人位であった。しかしこれも後、個人的私有制と化して解消してしまつたがこれらの土地は凡て Owen より譲られたものであった。3月初め第IV村の計画があつた。村の知識階級の hyperenthusiasm

によるもので Owen の 2 人の息子が先頭になっていた。しかし貴族の *coup d'état* とみられたこの計画は Owen に抑えられて実現できなかった。2月19日と先に書いたがこの日 Owen は永らく延引していた村の財政上、経済上の基本問題についての彼の意思を表明したわけだった。彼はそれまで Rapp への支払 the Preliminary Society のための支出及び村へ補給した生活物資購入のための経費、長期に亘る旅行の費用など Owen の全財産25万ドルの3/5を費消していた。しかも未だ Rapp へ4万ドルを支払わねばならない。Owen としては彼の財産は何程も残っておらずいつまでも村民の生活物資の補給を続けられなかった。その土地建物を村民に売渡すかあるいは、賃貸借契約にしたいと思っていた。そのことは1825年9月27日ロンドンで単利でよいなどといっているの知られる。村民に対して土地を寄附するつもりはなかったわけでこれが2月中旬に住民に知らされたのだ。しかも彼は3月に入ると村民に不動産を売渡そうと言い、評価は村で選出された委員に委すとし12年賦年利5%にしたい。但し協同村計画以外には土地は使わせないとやった。これは住民にとって致命的な衝撃であった。それこそ熊蜂の巣に石を投じた如き大動揺を惹起した。生産は当分消費に追付かず物資の補給は借金として残るだけである。怠け者や無能力者はいよいよお互の負担となる。No. I 即ち母村の評価額は12万6520ドルとされたからその利子だけでも年6326ドルの大金となる。その上 Owen は準備社会時代の出費とみられる2万ドルを債権として認めよと言った。これでは多少責任をとるつもりのも手がかかぬ。3月16日これらの金額が発表されると完全なる驚愕が全村を覆うた。但し Maclure の土地価格は5,000ドル Feiba-Peveli のそれは7,000ドルという少額であったため、この2団体は Owen の申出を了承している。とにかく Owen の timing は甚だ拙く村の最大の危機を選んで提出されるような結果になってしまった。⁽¹¹⁾

ところが丁度この3月16日に Maclure は村にいて友人に手紙を書いているがその内容は Owen の苦勞とは大分違ったものだ。“我々はここへ来て2ヶ月位になるが新制度の教育について実験を行い若干成功している。生産階級の子弟のために農学校をつくる私の計画は永年社会の偏見のために妨げられてきたが Owen 氏もこれに賛成してくれて彼の凡ての手段と材料とを提供してくれたので私はアメリカで彼に協力することにした。少年学校の一部では子供達に靴を作らせて

おり彼らはやがて全村の靴を供給出来よう。仕立職大工職工の仕事も学校で実習させる。これらの作業は数学博物などという精神的労働からの recreation として交互に行わせる。体操の代用として農業と園芸に働かせる。協同村の子供が400人程おりその他国内各地からの子供も加わっている。女子も男子と同じい教育を Fretageot 夫人によって与えられ、木綿羊毛の工場と洗濯、料理場で交互に働らく。学級編成にしているが一つの作業に半日以上働かせなのは疲労を軽減するために variety をもたせるのである。私の経験によると子供というのは正しく管理すれば授業と実習とによって自らの衣食を自給しえて関係者の負担にならず、むしろ助けになる。この学校は色々な意味でアメリカ第1等の組織をもっている。大人でも子供でも善いことをしなければ悪いことをする。人間によき習慣をつけることが大切である。そうすれば凡ての有用で必要な職業をたやすく遊びに変えることは出来る。こうして人生そのものが娯楽 *pastime* になる。”⁽¹²⁾

Owen は彼の計画に応じた人々から24人を選んで the nucleus とし彼らを相手に契約を結んだ。24人が契約の責任をとり次に彼等が残りの村民と契約を結ぶというわけで nucleus は1826年3月21日までは村を支配しつつあった。その後数ヶ月間村は比較的平穩に治まり文化的諸行事が活潑に催された。

Maclure は1826年5月17日号の *New-Harmony Gazette* に次の如き文章を寄稿した。“最も必要なことは真面目に働らく村民を怠惰無責任な村民から護ってやることだ。その目的のため各人の1日の生産量を届出させ労働時間を公表することにしたが、問題は一向に解決せずむしろ弥々忌々しいものとなった。何故ならば労働時間が等しくとも労働の中味に相違があるからだ。正直で能率の高い人の1時間の労働は能率のわるいものの4時間以上に相当しよう。それ故に協同村の仕事部門別 departments と仕事別 occupations に区分けして各人を分属させ、労働させれば能率は上がると思う。そして各部門にその部門に割当てられた生産物をまとめて本部に供出させる。この区分けはNo. II, No. III にも及ぼすとよい。この方法は cooperative superiority の完全な意味の例にはなるまいが、今俄かに行きすぎた試みをして失敗するよりよい。同職者が集合すれば友情も信頼も高まり小さい部門内部で責任をとるのだから支払責任も軽減されよう。住民は少時 social system に慣らさるべきで、精神的労働を軽視してはならず、同じく生産的なものと考えられる

べきだ。1日1.5ドルを稼ぐ職人と¼ドルしか稼げぬ農民とを平等に待遇すれば納得しないものも出てくる。このような障害は前述の区分けによって早く解消したい。この方法をとっても個人主義的競争を誘発するわけでないし、その他の教育、娯楽凡てのものはもとより村民平等の権利義務の上に立って取扱われるわけだ” Owenはこの主張に賛成し、1826年5月28日村民の同意もえたのち村を3 societiesに分けた。School or Education Society, Agricultural and Pastoral Society, Mechanic and Manufacturing Societyであり、これらはBoard of Unionで結合されOwenが1820年から主張していたlabor noteをお互に流通させた。ところが遅くとも6月初めまでにEducation SocietyはOwenの手からすっかり独立してしまった。というのはOwenとMaclureとの間に契約が結ばれ900 acresの土地と若干の建物がEducation Societyに譲渡されたのである。これが両者の間に取かわされた初めての正式の契約書としてお互の財政上の責任を明確化したものだったが、Owenは両者の関係を最初から完全な共同経営partnershipとしてゆずらなかつた。とにかくMaclureはこの契約でOwenに対して4万9,000ドルの支払を認め直ちに2万4,500ドルを支払い、その後8月頃1万ドル翌年1月までに合計3万8,000ドルを支払った。その後またRappに4万ドルをOwenに5,000ドルを支払ったのでMaclureのNew Harmonyへの全投資は8万3,000ドルとなる。その他学校の備品や教師達の俸給に至るまで負担したのだが、月40ドルで相当な一人暮らしの出来た当時として彼の社会改革、教育改革のための闘いはOwenに劣らず実に真摯であったといわねばならない。こうしてOwenの母村とその他の団体との関係が不調となるしOwen自身村民達から憎悪され非難され、ずい分不快な日を送ったようであった。これは一つには彼の支配下に残った者達が流浪者居候狂信者と言うような劣等の者が多かったためでもあり、この点MaclureもOwenに同情してその9/10がgood for nothingだと言った。偏狭なる共産主義者Paul Brownの如きはOwen攻撃の急先鋒だったが彼は1826年7月30日村の集会で発言し“我々はあなたの財産からの利益をここの生活の主たるmotiveとすることを期待して移住したのだ”などと乱暴なことを言っていた。(13)

1826年6月8日にMaclureは4ヶ月の研究旅行のため村を發ち、6月9日Fretageot夫人に手紙を書

く。“出發以来耳にすることはOwen氏が働きかけている素材の劣等さについて、私が僅かにかれらに対して抱いていた最後の信頼もこれでいよいよ崩れ去ってしまった。前社会の惨めな政治のために怠惰な不平の多い腐敗した習慣に汚された人物は避けなければいけない。Owen氏の借金の証書に私の名前を書き加えてはなりません。私の財産は人類の幸福のための唯一の方法としての学校のために捧げられたものです。村の住民のOwen氏に対する態度からみても彼等がどの様にOwen氏の原理を理解しているか察しられます。彼等はそれを単なる学説としてしか受取っていない。また村では自然科学的学課を無用のもので金の浪費にすぎないと言っているらしい。”Maclureは6月20日F夫人へ手紙を送り“どれ程大きな財産でもOwen氏のように乱費しては続かない。やり方を変えないと彼の金銭的独立は破滅します。そうなっては彼はこの国では金の力による外何もしなかつたのだから彼の希望の凡てが消滅してしまふ。彼の信望も影響力も無となるHarmonyの財産をうまく使っておれば決して大きい損害をこうむらなかつたはずです。”(14)

1826年7月21日F夫人に送った手紙をみると“アメリカにおける協同主義の友人達の希望と期待とは驚ろくべき程に挫けてしまった。Owen氏の描く理想図と現実との間に100年のズレのあることを彼が忘れたためです。そのような高さからころげ落ちた衝撃のために人々の努力は麻痺してしまつた。しかし最近まで1 acre 1ドルで森林を含めた立派な土地が買えたのだから1,000ドルで素晴らしい建物が立つた。2,000ドルあれば村がつくれたのです。こうして小さな協同村をいくつか作つた方が自給自足も楽にいったでしょう生活物資をOwen氏の補給に頼り住民がその生産に真剣にならなかつたことが村の崩壊を早めたのです”同じく7月31日付の彼の彼女への手紙をみると“Owen氏の失敗は金力を伴つた彼の激しい熱情のためだったと早くから見てきました。金力によって革命を起そうと考えたのだが、しかし革命はたとえそれが波等の利益のためのものであつても遅々たる大衆の蝸牛的ペースによつてもたらされるものです。またOwen氏のシステムが有力階級の支持と黙認をえられると考えることが浅はかです。それどころか凡ての迫害誹謗反撃を予期しないのはうかつの至りです。”(15)

1826年7月4日有名なDeclaration of Mental Independenceを含むOwenの講演が村で行われた。アメリカ独立50周年記念日なのだがOwenはその際

私有財産制と既成宗教と婚姻制を人類を奴隷化する悪の trinity として口を極めて罵倒した。Conservatism に対するこの挑戦は New Harmony 実験に対する凡ゆる敵と現存秩序の擁護者達を同盟させた。8月2日 Maclure は Owen の講演の内容をきいて“真実であり堂々として話された”と賞めたが、しかし Owen の宣言によって巻き起された嵐は日を追うて激しさを加えるので、これでは学校事業に災いを及ぼすとして Maclure は1826年9月20日1友人に手紙を送った。その一部が新聞に発表されたが、“私は熱狂的改革者の性急さを抑えるために出来るだけのことをしてきた。しかし例の三つの見解と協同村制度とは何の関係もない。丁度樹木の根元にコケが出来てもその木の健康と繁栄に影響なきと同じだ。それらは Owen 個人の意見にすぎず、また Owen という人は500哩に1人という人だが、この宣言は New Harmony とは何の関係もない。我々は彼に代価を支払い多少残額はあっても彼の財産を買いとっているのに彼に対し何らの精神的、具体的依存関係はない。Owen の計画の支配下にはないのである。”その頃 New Harmony における性的不品行の風評が反対者の間に広く流布されていた。そのためこの村へ娘達を送っていた親達が非常な不安を抱いたので Maclure が彼等を安心させるために手紙を書いている。その手紙についてF夫人にも報告し“New Harmony の住民の品行について私は私の訪れた地球上のいずれの部分におけるよりも立派だと彼女に保証しました。既婚者たちもどこの人々よりも誠実であり、若者達は純潔です。節酒しており秩序を重んずると言いました。ニューヨークなどの乱行ぜい沢不品行を考えてみなさい。また商業社会の不安定を反省してみなさいと大いに雄弁を振りました。なお私が他の協同村から学んだところによると勤労のみがこのシステムを成功させるのです。Owen氏は富を以て準備社会の全メンバーをスポイルしてしまった。私が Owen に6万ドルを前払したのも彼の危急を救いたためでした。むしろ小さな協同村を数百ドルでいくつも設立する方が良かったのです。the Communities of adults は各方面で失敗しています。これらの試みは貧困階級のために計画されたものであるにも不拘、当のこの階級が無智と偏見のために一向に支持せず、一方支配階級は蟻の如く勤勉でもぐらの如く地下に潜って働きます。結局学校こそ個人が人類を利益し又は進歩させる唯一の方法だと思えます。我々の学校はうまく行くと思えますが、時間をかけるべきです急いで

はなりません。とにかく現在は Community of adults を推進する時期ではない。Owen 氏も金使いを急いではならぬ。彼の英国にある財産は渡米前の 1/4 に減ってしまっています。私は大人や両親に対して抱いていた少し許りの信頼を今や全く失ってしまいました。それゆえ如何なる教育制度の実験も孤児を除いては fair tryal は不可能と思えます。帰村したら50人か100人位の良い方法を相談しましょう。実際大衆の無智と盲目とはこの自由の国においてさえ驚ろくべきものです。”⁽¹⁶⁾

1826年8月9日号の *New-Harmony Gazette* に Owen の教育に関する講演の記録がのせられたが、それは Owen の学校干渉の意図を明らかにしたものであった。これが Maclure を刺戟し、1826年8月21日付彼はシンシナチからF夫人へ手紙を書いた。“貴方は私を Owen 氏の partner と言うが私は彼の行動について何の責任もない。彼の行った売買は私の意思に反するか私の知らぬまに行われたものです。私は反対すると彼は彼流にやると言います。Rapp への支払分については私は半分はもちます。しかし Owen 氏のシステムに対する私の好意は今も少しも変わっていません。彼のやり方が気に入らないのです。彼が信任している如き者達と関係をもつよりは私は金を Ohio 川へ捨てた方がよいのです。この半年間計画実現の彼の才能をみて信頼は完全に変化させられました。”Maclure は8月29日付F夫人への手紙でついに “He is certainly, I had almost said, mad.”と言った。8月20日の Owen の教育に関する講演が一層 Maclure を怒らせた。Maclure は Owen の得意とした parrot method を不可とした。しかもこの日の発表では村の全住民を毎週3回ホールに集めて教育するといひ、学校の子供達も出席すべきである。この計画にF夫人が賛成して計画の一部を担当するという。the Education Society の人々は怒ってF夫人を除名してしまったと Paul Brown が書いている。⁽¹⁷⁾

1826年8月30日 Maclure はシンシナチからF夫人へ手紙を書いた。“貴方は Owen 氏の素直さを大変賞めるがそれは外観だけのことで彼の行動となるとテコでも動かせぬ。ペルシャ人かメジア人の法律の如くです。Owen 氏の人柄について貴方が騙されたとしても非難しません。私自身前半生においてこうむった誤りを合計しても今度の間抜けさには及ばないのです。Owen 氏の行方では当分この国では失敗だと思えば思う程協同組織の有用性に対する私の評価と確信は高め

られます。彼は人類中最も無能の者共以外何人をも利益しない金を使ったのです。功名心を抑えて下さい。”⁽¹⁸⁾

Owen は第4回の村の改組を計画し1826年9月17日集会で提案した。学校団体のみ除き他の団体を統合せんとするもの。10月2日新協定が決定されたが村を5人制の board of trustees を選んで委す。村民を再選考して好ましからざる者は退去して貰うこととする。Paul Brown の如きこれを despotism とか star chamber とか激しく攻撃した。こうして Owen 支配下の村は相変わらず Community No. I として再出発した。その頃9月19日 Maclure は Louisville から F 夫人に手紙を送った。“私は貴方だけを信じているのです。学校協会のその他の人々の心は私から離れています。ただ Owen 氏の干渉を避けたい許りにこれらの人々のために金を立替えたのです。貴方の心をこれ程までに迷わせる Owen 氏とは何という魔法使いでしょうか。貴方は Owen 氏の parrot method が好きなようですが、しかし子供の理解しないことがらを詰め込むのは針山に針を突きさすと同じでしょう。”⁽¹⁹⁾

さて Owen の全住民教育のプランは住民の賛成を得て実行に移された。大ホールで絶えず色々な講義が行われ視覚教育も併用された。住民達は講義に出席して傾聴すればそれで価値ある知識が身につけられる。Maclure はこれを parrot method として最も不快としたししかし Owen の全住民教育は永くは続かなかった。教育協会内部の不和もそのうちに納まり学校は元通りに続行されることになる。Maclure はこれを喜び9月25日 F 夫人に手紙を書き“勘忍ということは凡ての徳の代用物です。決して急ぐなと言うのが Quakers のモットウです。私は Owen 氏の考え方の中に欠けている自然科学を出来るだけ教えてゆきたい”と言った。彼は10月7日 Say を伴って帰村した。⁽²⁰⁾

III Owen と Maclure の訣別

やがて村の trustees の取扱いが不公平だと言う非難がやかましくなった。その頃 Maclure は彼の学校を Owen から完全に分離させるためにその法人化を州議会へ請願していた。しかし New Harmony の非正統派的風潮が嫌われて1827年1月17日議案は審議未了とされてしまった。Maclure は1826年11月25日冬を避けて離村し南に向ったが途中11月28日 Mount Vernon から F 夫人宛手紙を書いた。“ここで私は N

o. I 村の多数の人と話す機会をもったが、村の様子は Owen の考えているのとは大分違うのです。彼は村に貴族的グループをつくり彼等に売店から欲しいものを得させている。trust 組織以来ある者は婦人服を8着も手に入れたらしい。このことが嫉妬と不満の種になっています。村の女達が教育の有用性を理解するにはまだ早すぎるようです。それを理解するまで彼等は凡て洗濯や料理などの肉体労働をせねばならない。Owen 氏が全村民に衣食を給していると言うのが本当でなければよいがと思うのです。Owen 氏はしかも必需品を仕入れ価格の50%も安くして与えているという。私の金を当てにされては困る。私は彼のために財産の半を費ってしまった。Owen 氏はあたかも宗教のドグマにとりつかれて夢をみているみたいです。Owen 氏は自分の意見と完全に一致する者以外相手にしないと云う風だが、それでは偽善者が悪党しか彼の友人になれますまい。村はもっと悪化してゆくでしょう。Dale Owen も William Owen も父が来春村を離れる前にもっと村について勉強してほしい。Harmony における私の経験は成人改良につき恐怖を与えました私の多くの友人達がこの見込ない企てに参加している事を反省して身振いしています。貴方は彼等から千哩も離れるとよい。Indians の中えでも移ってしまうがよいでしょう。”⁽²¹⁾

Maclure の不在中1826年11月29日、New-Harmony Gazette は学校協会の土地建物を問題にし始め境界に間違ありとして一部返還を求めに至った。Maclure はもとよりこれに應ぜず、Owen との関係はいよいよ不明朗な様相を呈してゆく。12月22日彼は F 夫人に手紙を書いて“Miss Wright の plantation とその黒人教育を見て感心しました。New Harmony とはいいい対照です。Owen 氏の経営の誤りについて考えてみると第1に村民の消費財を自給しえない以上住民の不安は去らず Owen 氏の資金が続かなくなれば村は忽ち崩壊すると考えています。その時の用意のために彼等はどんなものでも掻き集め略奪するのです。社会組織の原理など少しも信用しないのです。Owen 氏の環境など理解出来ないのです。第2にかくも重要な生産が Owen 氏の選びし人々の無智のために遅れすぎてしまったことです。指導層が村民を不慣れな仕事に従事させて能率を落しました。靴工に馬鈴薯掘りをやらせて腕を鈍らせたのです。第3に村民に不満を抱かせたのは不公平ということでした。”⁽²²⁾

Maclure は [Charles Fourier から attractive

industry について影響を受けていたようである。この考え方は1826年3月16日 Silliman へ書いた彼の手紙に現われているが、今度も F 夫人に書いた1826年12月26日付の手紙にはもっと詳しく書いている。しかし彼が Fourier の名前を引用したのは1830年でこれが西半球の書きものに Fourier の名前が現れた初めだと言う。“私は永い間生涯の職業に愉快を結合することを念願してきました。人生を娯楽に化することです。これこそ我々を最も手近かな確かな容易な独立への道に進ませるものです。私自身この点で完全に成功したのです。私の現在の凡ての喜びと満足とは habit によって獲得されたものです。この habit は私が30才すぎまで出来ず苦しかった。恐らく裁縫、洗濯、料理などの女性の仕事も幼い頃からの habits によって娯楽化しようと思う。New Harmony の女達は無用のしかも金のかかる行為ほど良いとして生活のために有用で必要な仕事を卑しむ恥とする考え方が強いのです。”⁽²³⁾

1826年10月設置された the trust は無力化したため Owen は再び decentralization を試みることとし1827年1月彼は村をもう一度 occupations によって区分けした。こうして村は“事実上 Community でなく the new social system でもなくなった”と Bestor 教授も言われる。Owen はせめて母村の周辺にいくつかの協同村をつくろうと考え、1827年2月6日 Dorsey への手紙でその plan を示した。“土地と来年までの食料その他の援助を共産と平等と親切の社会をつくる人々に母村から補給しよう。しかし全体の幸福のためにかくの如き結合をなす人々は New Harmony から去って貰う。”1827年2月24日 New Orleans から F 夫人宛の Maclure の手紙をみると“偏見が喉元まで詰っている現在の人類に対して原理を発表して驚ろかすのではなく先ず実物を示す必要があります。原理などといってもまだまだ悩める人々の救済になりえません。ゆっくりと小規模の実験を試みるのがよいのです。銃の台尻でなく楔の小さな尖を頑な偏見に刺してむやり方を新しい計画とする貴方は正しい。Owen 氏は彼の予想に反して協同村の実験に失敗したが村の実情にあうように途中で計画変更を行い最善の素材を集めて小規模に実験すべきでした。世界の人々が支持したのは Owen の実行方法でなくそのシステムです。Owen 氏の無力と失敗を思うにつけて私としてはこのシステムをいよいよ良いと考えます。Owen 氏はこの2ケ年の実験の後、彼が間違いなしとした環

境から150人を退去させざるを得なくなっていますがしかし残される者達も協同村に適わしいかどうか。何故なら彼等に対する唯一の教育は生産でなく消費でした。勤労の代りに金であり注意の代りに怠慢、節約の代りに浪費だったからです。”Maclure はこの手紙の後2ヶ月村へ帰らなかった。Paul Brown は1827年2月1日を“DOOMSDAY”と叫んで Owen に喰ってかかる。この日若干名に解雇通知が出されたためだった。F 夫人は1827年3月2日付で Maclure に手紙を書き“Owen 氏は今や村人に対して労働して自給するか村を去れと言っています。働らかねば喰えないとなれば怠け者の心も引締まるでしょう。彼は真に有用なものを確める唯一の手段をとることにしたのです。”Owen の温情と寛大もついに最後の手段をとらざるをえない段階に達したのである。⁽²⁴⁾

Owen は Rappites に対して1827年5月及び28年5月にそれぞれ2万ドルずつ支払う契約をしていたので Frederick Rapp は1827年5月合計4万ドルを欲しい旨を申入れてきた。Owen は資金もなく Maclure に未だ9万ドルを出資する義務ありとして Rapp への支払を依頼した。Maclure は Owen に対しては残金2万1,000ドルを支払えばよいとしており、その中1万1,000ドルは教育協会の債務であり1万ドルが Maclure の forfeiture の積りでいたのだが、この機会に徹底的に財政問題を解決しようとして Maclure は Rapp に4万ドルを支払って債権を譲渡して貰い Owen を訴え Owen との連名の契約は一切無効なりと公告した。Owen も負けておらず、却って2人の partnership は完全に有効であり9万ドルを支払うべしとの訟訴を提起した。忽ち journalism によって全国的話題となったが3、4日後に仲裁によって早急に解決された事はやはり君子の争いであった。即ち仲裁人はやはり一種の partnership が存在していたと認めると同時に Owen の要求を半減させ Maclure から Owen に4万ドルの債権を譲らせ、これに5,000ドルを追加させた。そして Owen から Maclure に5月3日490 acres の地券を譲らせこうした計算によって訴訟を取下げたのであった。Maclure は6万ドル支払う積りでいて8万2,000ドルを支払わされ、証書に4万4,000ドルと評価された財産の所有者となった。争いの中心は教育政策だったと Owen は言った。Owen は Maclure の学校に自分の考えを加味してくれれば“たとえ質の劣等な住民であろうとも全住民を融和し、一つのまとまった協同村と

して組織して行けた。しかし私が限りなく信任した人々のなすところ全く私の期待を裏切ってしまった。子供達を分離したクラスに孤立させて一家族のような親密さを以て交わることを妨げ全住民の団結を妨げた。”⁽²⁵⁾

Owen は1827年4月7つの団体との契約を発表したが NewHarmony からは一つのグループも希望しなかった。1月頃山師 William Taylor が Community No.IVをつくるという Owen を欺き、その後これと手を切るために Owen は随分苦労した。1827年5月6日 Owen は New Harmony estate に今や共産平等の 8 Communities がつくられると言った。この場合彼は New-Harmony town と学校協会とを除き Feiba-Peveli を含めている。Owen は1827年5月27日遂に New Harmony に対して訣別の挨拶を陳べたが、この時には “Ten Social Colonies of Equality and Common Property” に話しかけた。“しかしこの度は formed とせず forming と言った。”彼が1827年6月1日村を去ってここに Communitarian の実験が終ったとされるが彼は1828年4月13日村を訪れ、ついに事業の100%の失敗を認めた。“実験は1827年4月で明白に終った”と Dale Owen も告白していた。Owen の10協同村の実体は次の如きものであった。the Education Society, Feiba-Peveli, Owen 支配下の New Harmony 但しこの母村は当然 training school としてやがて完全な協同村の一部となろうと Owen は言った、Taylor の Community No.IV, 一人一人いない Macluria の残骸 4家族が入居している大きい cabin, 他に散在する3戸の huts それにはドイツ人移民の1家族が居住していた。⁽²⁶⁾

Maclure は Owen との財政上の争いが解決するとまっしぐらに教育事業に全力を傾注した。1827年5月孤児学校の公告を出し一方科学研究を盛んにし研究業績の出版も積極的に推し進めた。科学雑誌も1828年1月16日 Disseminator of Useful Knowledge の名で the School of Industry から発刊された。Maclure は健康上の理由から冬期間はいつも New Orleans へ行っていたが奴隷州を不快として1827年の暮れにはメキシコへ行った。Owen は相変らず協同村計画のために狂奔しており、Campbell との討論メキシコでの協同村の計画に際して F 夫人と Maclure に会う機会があった。即ち1829年1月22日メキシコの Jalapa で Maclure に会い New Harmony へは同年3月30日に

訪れた。しかし Owen は“流星の光りを放ってひと時二人の視線を惹きつけたにすぎなかった。”Maclure は1829年1月28日付 F 夫人に手紙を書いて次の如く述べた。“私は Owen 氏にくれぐれも言いました。貴方のシステムは時代よりも進みすぎている。凡ての善害に対する貴方の過激なる対策と特に目立った悪弊のみに対する国家と教会の救助策との間に神秘的な大きい隙間がある。物理的掘割りとも見るべきこの隙間が偏見の古城を取囲んでいて今日の知識の状態では越えることが出来ない。それは数世紀の間国家と教会の凡ての才能と明敏が工夫し凡ゆる手段を以て防衛し強化してきたものだからであると。”⁽²⁷⁾

1831年11月4日 F 夫人はついに New Harmony に別れを告げた。それからパリーで1年間を過しメキシコで Maclure に会うために太西洋を渡った。Maclure には会えたようであり、そして4月のある日 Mexico City で世を去った。“New Harmony は Rapp, Owen, Maclure の記念碑であったと同じ意味で F 夫人のそれでもあった。”Maclure は彼の教育的実験の結果に満足して1840年3月23日死んだ。この村から新教育運動の力強い光りが四方へ放射され科学研究においても少くとも25年間アメリカの一中心となった。しかも Maclure は Owen の情熱に劣らず最後まで新しい social co-operative system に対して深い憧憬と確信を抱きつづけた。“この組織における深き友愛の涵養、意見に対する寛容、真理に対する愛着と偽善への恐怖、正義に対する愛、労働の果実の獲得を万人に可能ならしむること、全人類に対する穏和なる取扱い人間の動物的欲望のほどよき満足、平和と善意の生活など凡てこれらのものにおいて協同組織の魅力は十分に発揮されるであろう。”⁽²⁸⁾

Owen の New Harmony 失敗の原因については Maclure もいろいろと論じている通りだが、私もそれについてここで簡単にまとめておきたいと思う。第1に入村者の決定に当って Owen は残念乍ら慎重を欠き選考を誤った。人種、宗教、社会的身分等について深く問わず寛大に入村許可をしたことが致命的な過ちとなった。第2に彼は開村当初からややもすると村を離れており、村の経営に本当に心血をそそいだと言えない。第3に村の生産計画が杜撰であって必要な労働者職人を集めえなかった。そのため生産は挙らず消費は縮められず、村民は早くも生活に苦しんだ。第4にかくして村の消費は生産を上まわりその不足分を Owen は私費を投じて補填した。このことが村民の依

頼心と怠惰を助長し村の崩壊を早めたのだと Maclure はきびしく批判している。第5に New Harmony 実験の規模が大きすぎたと見られる。第6に村の共産制については Owen に定見がなかった。最初から彼の考えをはっきりさせておけば良かったものをそれが出来なかったために村民は混乱した。第7に村民の提供する労働と与えられる分配との間のバランスの問題もかれらを納得させなかった。そのため村民の生産意欲はいよいよ減退した。第8に教育政策についての Owen と Maclure の対立と不和とが少からず村民の志気に影響した。第9に村に対する Owen の財政的援助はいつまでも続くはずなく、経済の見通しは当然見込みなしということで村民の心は荒み Owen は憎まれた。第10、こうして窮地に追いこまれた村民に対して Owen は俄かに土地建物の買取り等無理を要求したこと。第11には悪質の住民の浅ましい言動、プロレタリアートの意識の未熟さ。Maclure は成人教育に絶望し身振りするとまで言った。第12支配階級反対陣営から今や猛然たる反撃が開始された。第13 Owen は1825年には54才で必しも老齢ではなかったけれどもいよいよ幻想的予言者の風格を濃厚化してゆく。Cole は“実業家としてあれ程名声高かりし人だったが、その頃は着想と完成の間の相違に関するセンスを失っていた”と言っている。第14手本にしていた Rapp 村が移転してしまったことも不利となった。第15村を取り巻く外界資本主義社会よりの絶えざる妨害。第16 Owen 自身確かに功をあげて早まった点がある。一方長子 Dale Owen は 父が他人を信じすぎるといってしばしば嘆いていた。Owen こそ人間の善意に対する信仰のための殉教者だったと言える。仁愛と寛容とは Owenism の真髄であった。かれは New Harmony において Maclure さえ絶望したような悪質の住民を最後まで援助した。次に Owen はその New Views 実験のためにあたかも豪雨中を轟進する列車の如くに敢闘した。まことに悲壮そのものである。そして社会的実験の代表的戦士となりイギリス並びにアメリカ社会主義の父となった。“Owen は人類愛という古い原理を説いた。人類友愛の希望と信仰と生ける事実を説いたのである”と Beatrice Webb が言っている。“Owen には失敗はあった。しかし彼は後代の子孫がより良く建設しうるよう基礎を築いた。彼ほど広く恩沢を及ぼした人もない。彼ほどに自己の信念の service において専心傾注した人も少かった”と Cole も書いた。Simon も“地球の果てを乗り越えようと

した「Owen丸」は当然坐礁してしましたが、人類の魂に憧憬と希望とを永遠に深く沈めた”と言った。最後に Maclure が Fretageot 夫人に対して繰り返し語った言葉を掲げたい。“Owen の失敗は当然だが一方彼が失敗すればする程私はその協同組織の価値をいよいよ高く評価せざるを得ない。”

あとがき

この小文を草するに当り最初にペンシルベニア大学 F. Hilary Conroy 博士の御厚情に対して心から御礼申し上げたい。先年来私は Robert Owen の the New Harmony Movement についてもっと詳細にしろべたいと思ひ関係資料の蒐集に手をつけたのであるが、130年以前の文献も少からず必要であり重だうた国内大学の図書館に当たってみても欲しい文献は備っておらずそれ以上に私の怠慢の責任もあって研究を思うように進めえなかった。ところが5年前に博士にお願い申上げる様になつたら引続き今日に至るまでしばしば貴重な文献を拝借し、又はフィルムにして読ませて頂いている。博士の御援助と御指導に対して深く感謝申上げている次第である。なお、今回の小文も先般博士より頂いた *Education and Reform at New Harmony, Correspondence of William Maclure and Marie Duclous Fretageot (1820—1833)*, edited by Arthur E. Bestor, Jr., 1948 を中心に Owen と Maclure の協力、とくに財政的協力、Owen の協同村経営の経過を見たものであるが凡て Bestor 博士の御研究の賜物であつて、私はただ博士の研究の跡を追うことだけで精一杯なのである。この書簡集は Contemporary sources として Owen 研究家にとって興味深く貴重なものであり、Conroy 博士のお取計によって私に対してその翻訳許可を発行者 Indiana 歴史学会から1961年5月18日付を以て与えられたことを深く感謝申上げている。近く何とかして公刊の機会を得たいと思っている。従つてこの小文ではこの *Maclure-Fretageot Correspondence* からホンの断片しか引用できなかったことを残念に思う。しかも Maclure の文章たるや構文は奔放、句読点もつけず misspelling は到るところにありしかも無類の悪筆というわけで、先年まで New Harmony の書庫にそのまま眠らされていたものであるが Bestor 教授が暗号解読者まで雇つてこれらの難文奇文を整理されたのである。その様な手紙、合計現存415通の中この往復書簡集には52通が収録されている。これを読みこなす程の語学力は私に

はないのであるが幸運にも金沢のアメリカ文化Center館長 Frank Underwood氏の御親切な指導を得て読み進むことが出来た。ここに厚く御礼申上げる次第である。なおこの小文には Bestor 博士の名著 *Backwoods Utopias, 1950* から多くのものを引用させて頂いた。同博士からは1957年9月24日付書簡を以て同書からの引用を許可せられた。御厚情に対し深く感謝申上げる次第である。

- 註 (1) Arthur E. Bestor, Jr., *Backwoods Utopias, 1950*, pp.146—151.
 (2) *Maclure-Fretageot Correspondence*, edited by Arthur E. Bestor, Jr., 1948, p.303, 305, 406; *Backwoods Utopias*, pp.152—153.
 (3) *M-F Corresp.*, p.306.
 (4) *M-F Corresp.*, pp.308—311; *Backwoods Utopias*, p.103.
 (5) *M-F Corresp.*, pp.313—314; *Backwoods Utopias*, pp.103—113.
 (6) *Backwoods Utopias*, pp.113—114.
 (7) *M-F Corresp.*, pp.320—322.
 (8) *Backwood Utopias*, pp.114—119.

- (9) *M-F Corresp.*, pp.322—323.
 (10) *Backwoods Utopias*, pp.121—133, 158—159.
 (11) *Backwoods Wopias*, pp.160—181.
 (12) *M-F Corresp.*, pp.330—331.
 (13) *ibid.*, pp. 332—335. *Backwoods Utopias*, pp. 184—188.
 (14) *M-F Corresp.*, pp.337—339.
 (15) *ibid.*, pp. 342—343.
 (16) *ibid.*, pp. 345—348, 351—353.
 (17) *ibid.*, pp. 354—355, 359—362.
 (18) *ibid.*, pp. 364—367.
 (19) *M-F Corresp.*, pp. 367—368. *Backwoods Utopias*, pp. 189—190.
 (20) *M-F Corresp.*, pp.369—370.
 (21) *ibid.*, pp. 375—377.
 (22) *ibid.*, p. 378.
 (23) *ibid.*, p. 379.
 (24) *M-F Corresp.*, pp.386 —391; *Backwoods Utopias*, pp. 194—195.
 (25) *Backwoods Utopias*, pp. 197—199.
 (26) *ibid.*, pp. 195—196.
 (27) *Backwoods Utopias*, p. 200; *M-F Corresp.*, pp. 403—404.
 (28) *M-F Corresp.*, pp. 406—408.